

ないと言っても過言ではないであろう。その遠因の一つは、世の人々の関心が食物としてのコンブ、ワカメを知っている、植物という認識には到っていないことにあるのではないかと想像されるが、こうした植物を研究している藻類の専門家の藻類の重要性、有用さが地球規模のものであることを世に浸透させる努力をあまり払ってこなかった？（これに対しては強い反論もあるでしょうが）責任も大だと思われる。しかし、最近読む対象はいろいろであっても、藻類の研究に従事している方々によって、藻についてのいろいろな切り口の書物が少しずつではあるが出版されるようになったことは喜ばしい。ここに紹介する、宮田昌彦氏による「潮だまりの海藻に聞く海の自然史」は、生物圏としての地球上での藻の起源から、進化、分類、生き方、人類生存にとっての藻の重要性などを、氏の研究史を

交えながら語っている。藻が学術研究の対象の世界から、植物として市民の中に浸透していく黎明期の書物として意義ある一冊と言えよう。ただ一つ、残念なことは、色が最重要ポイントである藻を示す写真がモノクロであることである。著者にはどうすることもできなかったであろうことは容易に想像できるが、どんな表現を使っても伝えきれない藻の魅力がこれでかなり失われたことである。読まれる方の参考に、以下に各章ののタイトルを挙げておく：1 潮だまりの海藻，2 地球史の生き証人＝シアノバクテリアが語る共生と進化の物語，3 小さな巨人＝褐虫藻が語るサンゴ礁の生活，4 海の仕掛人＝サンゴモが語る海中林の成り立ち，5 小さな海藻に聞く地球の呼吸のはなし。

堀 輝三（筑波大学生物科学系）

## 書評 新刊 紹介



館脇正和・星澤幸子 著

「食べてわかった 昆布パワー」

北日本海洋センター 1999年6月刊

133頁 700円（税込）

日本藻類学会の3ナントカ人と称されるトリオはこれまで何組が存在したのだが、そのひとつ、北海道大学の館脇さん、神戸大学の榎本さん、それに東京教育大学（筑波大学）の私という臨海トリオは35年の歴史を有する。盟主格の館脇さんは海藻の発生学と培養法の権威として内外に知られる存在だが、藻食論という裏芸の持主でもあることを知る人は少いだろう。幸いにも私はごく親しい友人の一人として、藻食論の恩恵に浴し、64歳の今日まで、無病息災に過ごすことができたのだが、本書の刊行によって、いよいよその恩恵の輪は世間に広がることになったのである。

藻食は日本人の食生活を最も特徴づけるものだったのだが、最近ではその価値に気づかない人が多くなった。館脇さんもそんな一人だったらしく、肉や脂っこい料理ばかり好んだツケがまわって、40代から便秘と大腸ポリープに悩まされたとのことである。ポリープ

再発の度に入院して切除という10年間の闘病生活の末にコンブを食べることに気づき、毎日少しずつ食べたところ、ポリープが再発しなくなったという。館脇さんの藻食論は、御自身の貴重な体験から出発し、15年以上ものあいだ磨かれたため、大変な迫力に満ちている。

学会の大会などで厳しい質問や講評を賜る館脇先生の著書なので、さぞむずかしい内容なのだろうと思われる人も多いだろうが、友人としての館脇さんはウィットに富み、そして非常に誠実な人なのである。おまけに共著者の星澤幸子さんは魅力的なクッキングキャスターである。プロローグとしてのお二人の対談は、学問の場では見られない優しい笑顔を彷彿させる。

10ページ少々のお二人の対談を読ませていただいただけでも、健康維持に果たすコンブのすごい力を納得してしまうのだが、館脇さんの本領発揮は60ページにわたる第2章「コンブくんのトンネルパトロール～からだの中のトンネルを行こう」である。陸上植物にはあまり含まれてない水溶性食物繊維がヒトの健康を維持するしくみについて、パトロール隊員「コンブくん」が人の口から肛門までの要所々々で活躍するという形で解説されている。小学生でも高学年の児童なら十分理解できそうな語り口で、とくに小学生が好き(?)なあの単語が3文字のカタカナでふんだんに登場したりするが、胃がんや大腸がんの発生過程におけるアルギン酸やフコイタンなどの抑止効果を始めとして、人体の生理学から西澤一俊先生顔負けの多糖類の生化学ま

で縦横無尽に筆は走る。

さて、コンブの偉大な力は理解できたが、毎日食べるためには工夫が要る。そのあたりを心得た館脇さんは、第3章をどさんこのクッキングキャスター星澤幸子さんに託している。テレビ番組でも活躍中の星澤さんオリジナルのコンブ料理からコンブおやつまで20例ほど、そしてコンブを上手に使うコツなどが約50ページにわたって紹介されているが、1例ごとに見開き2ページの右側に出来上がりのイラストと4人分の材料、左側に作り方とひとくちメモというように整理されているので、本書は本邦初（もちろん世界で最初）の大変重宝なコンブ専用クッキングブックということにもなる。

食欲をそそる墨絵風のイラストの下に記された材料は入手しやすいものばかり、作り方も手順が2~5段階、ひとくちメモは数行という構成なので、これなら男性でもコンブ料理が楽しめる。館脇さんは室蘭の北大海藻研究施設長としての単身生活の間にも毎日きちんとコンブを食べておられたので、星澤さんはそんな

館脇さんを意識して簡単なレシピを工夫されたのではないかと思ってしまうほどである。ただ館脇さんは2年前に退官され、本書は専ら夫人に活用されていることだろう。

本年3月に定年を迎えた私は、南国伊豆から三陸へ移り単身生活を続けることになった。これまでは館脇さんから送られる日高昆布を専ら消費していたのだが、三陸の海にはコンブが自生している。本書はコンブの産地で単身生活を送る私へのまたとない贈り物となったのだが、館脇さんは、幸せな臨海生活を支えてくれた全国民への感謝の気持を本書に託されたのであろう。同じ臨海トリオに属する神戸大の榎本さんは284種からなる「瀬戸内海海産藻類標本集」150部刊行という壮挙をとげられたが、同じ気持からだったはずである。本書は北海道内限定販売とのことだが、国内に広く読者を得て、国民の健康維持に活用されることが、臨海トリオ全員の願いでもある。

横濱康繼（志津川町自然環境活用センター）

## 書評 新刊 紹介



"Proceedings of the Fourteenth International Diatom Symposium. Tokyo, Japan, September 2-8, 1996"

Edited by Shigeki Mayama, Masahiko Idei & Itaru Koizumi. 1999. 638pp. Koeltz Scientific Books.

DM 380/US\$ 218

ISBN 3-87429-401-3, ISSN 0933-0755

1996年9月に東京で開催された、第14回国際珪藻学会に発表された論文集がこの度刊行されました。装丁はハードカバーで638ページとかなりのボリュームです。

本編の構成は、Taxonomy & Systematics 13編、Growth & Life cycle 5編、Ecology 11編、Paleoenvironments 10編、Stratigraphy & Genealogical Evolution 6編の計45編が掲載されています。論文は、新種記載を含め、日本・アジア地域を取り扱ったものが半分にも及んでいます。以下に主な論文題目を紹介します。

<Taxonomy & Systematics>

- MANN, D. G.: Crossing the Rubicon: the effectiveness of the marine / freshwater interface as a barrier to the migration of diatom germplasm.
- CHANG, T. P.: Reexamination of diatom type material of "*Frustulia operculata* et *F. ventricosa*" C. A. Agardh.
- ROUND, F. E.: Ecology and taxonomy - Is there a relationship in the diatoms?
- STOERMER, E. F. and M. B. EDLUND: No paradox in the plankton? - diatom communities in large lakes.
- EDLUND, M. B. and E. F. STOERMER: Taxonomy and morphology of *Amphora calumetica* (B. W. Thomas ex Wolle) Perag., an epipsammic diatom from post-Pleistocene large lakes.
- FUKUSHIMA, H., T. KOBAYASHI and S. YOSHITAKE: Morphological variability of *Cymbella lacustris* (Agardh) Cleve in a sample from Neusiedler See (Austria).
- NAUTIYAL, R. and P. NAUTIYAL: Altitudinal variations in the pennate diatom flora of the River Alaknanda - Ganga in the Himalayan stretch of Grahwal region.
- NIKOLAEV, V. A. and D. M. HARWOOD: Taxonomy of Lower Cretaceous diatoms.
- STRELNIKOVA, N. I. and T. V. LASTIVKA: The problem of the origin of marine and freshwater diatoms.
- WANG, G.: *Pliocaenicus kathayanus* sp. nov. and *P. jilingensis* sp. nov. from a diatomite of Jiling Province, northeast China.
- TANAKA, O., M. KIMURA, A. ISHII and S. MAYAMA: Upper Cretaceous diatoms from central Japan.
- KOCIOLEK, J. P., A. D. MAHOOD and K. L. NUTILE: